

市長記者会見記録

日時：2016年11月1日（火）午後2時02分～2時40分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：平成28年度かわさきマイスター認定者発表について（経済労働局）

<内容>

《平成28年度かわさきマイスター認定者発表について》

司会： それでは、ただいまより市長記者会見を始めます。

本日の議題は、平成28年度かわさきマイスター認定者発表についてとなっております。

それでは、市長から、平成28年度かわさきマイスター認定者を発表いたします。市長、よろしくお願いいたします。

市長： こんにちは。よろしくお願いいたします。

それでは、平成28年度かわさきマイスターに認定いたしました5名の方々をご紹介します。

本市では、市民生活の向上や産業の発展を支えるすぐれた技術・技能の振興・継承を目的として、平成9年度にかわさきマイスター制度を創設し、毎年、公募により候補者を募り、ご応募いただいた方々の中から、特にすぐれた技術・技能をお持ちの方を市内最高峰の匠「かわさきマイスター」として認定をしております。

今年度は15名の方々からご応募があり、かわさきマイスター選考委員会において慎重な審議を行っていただき、本日ご出席いただきました5名の方を平成28年度のかわさきマイスターに認定いたしました。

今年度の認定者5名を加え、合計で69職種91名の方々がかわさきマイスターの認定者となります。

今年度マイスターに認定した方々の職種はさまざまですが、共通していることは、卓越した匠のわざを保持されているだけでなく、みずからの技術・技能の継承や後継者の育成にも積極的に取り組まれているところにあります。

長年にわたる研さんにより、その道をきわめ、後進の目標となられた皆様のご努力に敬意を表するとともに、皆様の持つ匠のわざが次世代のものづくりの発展にしっかりと生かされることを大いに期待しております。

それでは、5人の方々につきまして、五十音順にご紹介をさせていただきます。

初めに、井武敏さんですが、職種はプラント設備仕上となります。井さんは、工場・発電所の大型かつ超重量級の機械設備の据えつけや接続に際して、その傾きなどの誤差が1ミリ以内となるよう調整する水平出し・芯出し技能をお持ちであり、川崎区塩浜にありますが山九重機工株式会社にお勤めの方でございます。

若手とのコミュニケーションを大切にするなど、技能の伝承や後継者育成にも尽力されているマイスターでございます。

今日は代理でお越しいただいております。どうもありがとうございます。

続いて、鈴木克明さんでございます。職種は写真師となります。鈴木さんは、昔ながらのネガフィルムから今日のデジタル写真まで、高度な修整技能をお持ちであり、高津区溝口にある写真のたなかやの代表取締役でいらっしゃいます。

町の写真館が姿を消していく中、若手写真家に対してご自身の技術を伝承するだけでなく、写真館という業態の存続にも尽力されているマイスターでいらっしゃいます。ありがとうございます。

続きまして、高橋信美さんでございます。職種はバネ製造となります。高橋さんは、ばねの種類に応じて、異なる加工の工程を1人で行い、機械に頼ることなく、みずからの手で正確にばねの形状をつくり出すことができる高度な技術をお持ちでいらっしゃいまして、麻生区栗木にあります相互発條株式会社の指導役でございます。

現在でも現場の第一線で活躍され、みずから積極的に若手とかかわることで、ご自身のノウハウを伝承し、後継者の育成に尽力されているマイスターでいらっしゃいます。ありがとうございます。

続きまして、秦義光さんでございます。職種は製缶板金技能となります。秦さんは、さまざまな工夫を凝らした独自の溶接技術をはじめ、高度の製缶・板金技術をお持ちで、川崎区浅野町にある恒心鉄工株式会社の代表取締役でいらっしゃいます。

現在でも第一線に立ち、若手の指導を行いつつ、社員寮でみずから社員への食事を準備するなど、心優しく若手技能者の育成に尽力されているマイスターでいらっしゃいます。ありがとうございます。

続きまして、宮永典隆さんですけれども、職種はケーブル接続技術となります。宮永さんは、大海の船上にいながら、直径わずか数ミクロンの光ファイバー海底ケーブルの接続という繊細な作業を正確に処理する技術をお持ちでいらっしゃいまして、川崎区駅前本町にある国際ケーブル・シップ株式会社にお勤めでございます。

現在でも第一線で活躍されておられますけれども、世界で4カ所、日本にはただ1つの海底ケーブル接続技術の訓練校で講師を務められるなど、社内外・国内外を問わ

ず、後進の育成指導に積極的に取り組まれているマイスターでございます。ありがとうございます。

以上、皆様方の職種はさまざまでございますけれども、いずれもその分野で長年にわたる錬磨と精進を重ねられ、高度な技術・技能を身につけられた方ばかりでございます。

本日、かわさきマイスターに認定された皆様には、今後ともすばらしい匠のわざを生かし、市内最高峰の技術・技能職者として、引き続きものづくり都市川崎を支えていただくようお願い申し上げまして、私からの紹介とさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。

司会： ありがとうございます。

続きまして、今年度かわさきマイスターに認定された皆様方から、一言ずつご挨拶をいただきます。私からお名前をお呼びしますので、演台にお進みいただきご挨拶をお願いいたします。

なお、認定者の井武敏様でございますが、本日はお仕事のご都合により出席できないため、代理で、井様がお勤めの山九重機工株式会社から大下晃様にお越しいただいております。

それでは、初めに、大下様、よろしくお願いたします。

大下 晃 様： 山九重機工、井武敏のかわりに参りました総務担当部長を拝命しております大下といたします。本日は、当社の井武敏が川崎市の最高峰でありますかわさきマイスターに認定されたということで、会社としては大変名誉なことであると思っております。同じ川崎市に在籍する会社としましては、こんな名誉なことはないと思っております。社員一同、全員が喜んでおります。

当社といたしましても、かわさきマイスターは井武敏で2人目の受賞という形になっておりますので、井も含めて、やはり後進の育成ということを常々考えております。本人の言葉をそのまま言いますと、自分たちのおじいちゃんと同じ年であると。自分のおじいちゃんだと思って何でも聞いてくれ、今どき怖いおじいちゃんはいないんだぞ、昔の怖い職人じゃないんだぞという形で若手に言っております。それでみんなにかなり慕われている人間でございます。

今後とも技術・技能を研さんしまして、第3、第4のかわさきマイスターが出て、それで川崎市の発展に少しでも寄与できればと思ひまして、会社一同、社長一同、そのような形で今後とも取り組んでまいりますので、今後とも、ひとつよろしくお願いたします。(拍手)

司会： ありがとうございます。

続きまして、鈴木克明様、よろしくお願いいたします。

鈴木克明 様： 溝口で写真のたなかやという写真館を営んでおります鈴木でございます。

個人的なことですけれども、今日、11月1日は、私の父が61年前、42歳で亡くなったちょうど命日に当たります。この日がマイスターの発表の日に偶然重なって、写真館を創業した父に感謝しております。

このマイスター制度ができて、川崎で初めて写真館からマイスターが今日認定されました。写真館の仕事を認めていただいて、非常にありがたく思っています。しかし、これから撮影に見えるお客様に、今以上に責任を感じて、プレッシャーを感じております。

川崎の写真館の組合構成は、40年ほど前には40軒ありました。それが今は10分の1の4軒に激減しています。デジタルができたせいでしょうか。写真スタジオで写した自分の写真とか家族の写真とか、記念の写真を残したいというお客様は、デジタルで気軽に撮れる現在でも、そんな極端には減っておりません。逆に、うちのお店で証明写真を写す方は増えております。年間、今日現在で4,100名ぐらいになっております。その中で、お客様のニーズを取り入れて、写真館という職業がお客様にこれからも支持していただけるように勉強したり、また接客しなくちゃいけないなど思っております。

本日は、ほんとうにありがとうございました。(拍手)

司会： ありがとうございます。

続きまして、高橋信美様、よろしくお願いいたします。

高橋信美 様： 私はばね業界で大体60年、いろいろ作業してきました。今現在やっている仕事は、航空機産業で使うばね。それはいろいろありますけど、防衛省関係の仕事もやっていますけど、これはちょっと守秘義務があるので詳しくはしゃべれません。それで、民間機の仕事も今は60%ぐらいのシェアでやっています。それは、うちはライセンス工場の第2請負というか下請という立場でばねを製造して、それを今現在、ボーイングの飛行機が飛んでいるんですけど、それに使われている、飛行機の大体9割ぐらいは、うちのばねがくっついて飛んでいるような状態。だから、毎日毎日、はらはらしながら監視しているところもあるんですけど、まあ、私がつくったばねだから大丈夫だとは自信を持ってやっている状態です。

ですから、ただ、ばねとは言っても、かなり奥深く考えると怖い仕事をやっている

という自負があるので、そう簡単に、気を抜いて作業できるというものではないので、いろいろ考えてやっています。

今日はどうもありがとうございました。(拍手)

司会： ありがとうございました。

続きまして、秦義光様、よろしくお願ひいたします。

秦 義光様： 私は、あまりおしゃべりは上手ではありませんので、お聞き苦しいと思いますけれども、生まれが昭和20年の6月です。終戦の2カ月前で、親の事情がありまして、私は15歳で東京へ出てきました。生まれは福岡です。それからものづくりの町工場で働きました。そのときに、まだ、今のような時代ではありませんので、物を見て、先輩の仕事を見て覚えろと言われる時代でした。仕事は嫌いではありませんでしたので一生懸命頑張ってやっていたら、この仕事で今度はNCとか、いろんな技術がどんどんはやってきましたので、私もそれに応じて少しずつ高度な技術を身につけることができました。

そして、そうやってやっているうちに29歳で自分でやってみたいなということで、自分で今の仕事を起業しまして、それから今度はNC、いろんなことをまた、何せ15で世間に出ましたものですから、いろんな、英語だの何だの、そういうことがほんとうにわかりませんので、なかなかNCとか、いろんな技術に入るのが難しかったんですけれども、頑張って、仕事が終わって、自分でそういうところを勉強してきました。

そうしましたら、何とか少しずついいものができるようになりまして、今度はそれを、当時、そのころに「3K」という言葉がはやりまして、汚い、きつい、危険というのがあって、若者がものづくりからどんどん離れていくような時代がありました。そのころに私はどうしてもうちの息子たちだけじゃなくて、ほかの若い子にも物をつくるうれしさとか喜びを伝えたいなということで、少しでもそういう興味のある人を集めまして、少しずつ少しずつ教えていって、何かいいものをお客様に届けたいという気持ちでやってきておりました。

そうしましたら、こういうかわさきマイスターという賞をいただくことができました。ほんとうにありがとうございます。(拍手)

司会： ありがとうございました。

続きまして、宮永典隆様、よろしくお願ひいたします。

宮永典隆 様： こんにちは。国際ケーブル・シップから来ました宮永です。本日はマイスターに選んでいただきまして、まことにありがとうございます。

私は、今ここにサンプルがあるんですが、海底ケーブルというものに携わっています。この海底ケーブルというのは、一番先端にあるんですが、この一番先端がガラスファイバーになっています。このガラスファイバーは髪の毛と同じぐらいの太さなんです。これが125ミクロン。実際には5ミクロンと中が言われているんですが、この125ミクロンのファイバーを左右対称につなぐ、接続をする。船上でというか、要するに大海原でこれをつなぐという仕事が私の仕事です。

こちらのパネルのほうにもちょっとあるんですが、これが私が接続をしているところのパネルです。これが船上で実際につないでいるところのやつなんです。これは東日本大震災のときに海底ケーブルが全断したんです。その全断の海底ケーブルを復旧するために、応援として行って接続したときの写真です。

このように、海底ケーブルというのは、今、全世界で大体99%が海底ケーブルでつながっています。あとの1%というのが衛星でつながっているんですね。この99%の海底ケーブルを、今、日本では私の会社、国際ケーブル・シップとNTTという会社で実際に補っております。こういう特殊な作業ですが、これを次世代につなげていくというのが私の仕事だと思っております。よろしく願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

司会： 皆様、ありがとうございました。

なお、かわさきマイスター認定書の授与につきましては、長く同一職業に従事し、また、市民生活に功績があり、他の模範となるすぐれた技術・技能職者を表彰する川崎市技能功労者等表彰式と合同で実施いたします。かわさきマイスター認定式・川崎市技能功労者等表彰につきましては、11月16日水曜日の午後2時から、川崎市立労働会館大ホールにおいて実施いたしますので、よろしく願いいたします。

それでは、ただいまご説明いたしました平成28年度かわさきマイスター認定者発表に関する質疑応答に移らせていただきます。なお、市政一般についての質疑応答につきましては、このかわさきマイスター認定者の皆様方が退室された後、改めてお受けいたします。

それでは、進行につきましては、幹事社様、よろしく願いいたします。

幹事社： 今月の幹事社です。よろしく願いします。

市長： よろしく願いします。

幹事社： まず、2点ほど、マイスターの関係ですね。69職種のうち91名ということは、一部重複している職種もあるかと思うんですが、それはどんなところがあるのかというのと、あともう一つ、私もいろいろマイスターの方が、例えば駅の、溝の

口でしたっけ、そういった、実演をするところを見たりしたんですが、そこでマイスターの方が漫画化をされたり、そういった形で見たんですけども、具体的にそれぞれの皆さんがどういう形で、後進の指導はわかるんですが、例えば市との関係として、どんな形でかかわっていかれるのか、そのあたりをお伺いいたします。

市長： まず、重複している職種ということのご質問ですが、例えば旋盤工の方は今までに5名、マイスターがいっぱいます。洋菓子、洋装、溶接、4名の方がいっぱいいます。美容師の方も、内総仕上関係の方もメッキの方も3名いっぱいという形で、重複されている方というのが何職種かございます。

今回、新しい職種というのが加わっているのが、4職種、新しく加わりました。先ほどと重複しますが、プラント設備仕上、写真師、ばね製造、ケーブル接続技術、この4つの職種が今回新たなマイスターの職種で誕生したということで、幅広くまた広がったと嬉しく思っているところです。

それから、今後の川崎市とのかかわりでありますけれども、具体的には、先ほどご紹介いただきましたように、市民の皆さんに体感していただくようなかわさきマイスターまつり、あるいは、かわさき市民まつり、来週行われますけれども、そういったところとか、各区の区民祭、それから技能フェスティバル等々、こういった事業にご参加いただいて、ものづくりのすばらしさということを実感していただく、体感していただくというところに積極的にこれまでもマイスターの方にご協力いただいております。

また、小中学校でも実演披露をしていただいたり、あるいは高校だとか職業技術校での実技指導、こういったところにも積極的に足を運んでいただいているというところでございます。

幹事社： ありがとうございます。じゃ、各社、どうぞ。

司会： よろしいでしょうか。

それでは、最後に市長を囲んでの写真撮影を行います。しばらくお時間を頂戴いたします。よろしく願いいたします。

(写真撮影)

司会： ありがとうございます。本件につきましては、これで終了といたします。ここでかわさきマイスター認定者の皆様方が退室されます。ありがとうございます。

なお、本会見終了後、マイスターの皆様方には別室にて待機いただきまして、ぶら下がり取材に応じていただけると聞いておりますので、後ほど改めてお願いいたします。

《市政一般》
（川崎フロンターレについて）

司会： お待たせいたしました。それでは、市政一般の質疑に入らせていただきます。

改めまして、進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

幹事社： では、まず幹事社から質問させていただきます。

私から、川崎フロンターレの話なんですけど、この前の土曜日に勝ちまして、いよいよ11月3日が最終日です。このまま、それなりに行くとチャンピオンシップということになると思うんですけども、それは置いておいて、今年20年ということで、先日、市長も等々力競技場の一部改修ということで最終的に決断されたんですが、改めて、フロンターレというと、どちらかというとJリーグの中では後発で始まって、いろいろ苦労されて、商店街もバックアップしながら、その後行政もかかわっていくという中で、この前もフロンターレは宝であるというお話をされていましたが、1つ目は、まず、改めて20年の流れというか経緯を踏まえて、川崎フロンターレというのは、市にとって、あるいは市長にとって、どんなものなのかというのがまず1点目です。

それからもう一点は、市長ご自身も後援会の会長をなさったり、例えば横浜市、横浜F・マリノスなんかの例も聞いてみると、なかなか後援会に市長がみずから会長をなさったりとか、いろんな、これから啓発のイベントもかかわっていますけれども、なかなか川崎のような例というのがあんまりないという話を私の取材では聞いていますよ。

そういう意味で、川崎の中で非常に突出しているスポーツ団体ということだと思います。そういう意味では、ほかの団体から見ると、多少どうなのかという声もなきにしもあらずらしいんですが、その辺を踏まえて、川崎フロンターレの今後について、市としてどのようにかかわっていかれようとするのか。あるいは、最近バスケットボールも新しくリーグができました。プロもできましたということで、そういったことの、バスケットボールのほかの団体との兼ね合いも含めて、市としてこれからどのように考えていらっしゃるのか、その2点をお願いいたします。

市長： まず、フロンターレの20周年についてどう思うかということですけども、20年前の関係者の話などを聞きますと、それこそ最初はほんとうに人が集まらなかったと。陸上競技場がスカスカのところから始まって、そこから関係者の皆さんが、クラブもそうですし、商店街の人たちを巻き込み、みずから街頭に立ってビラを配っ

たりとかという、すごく地道な活動をしていくことによって市民の共感を得たんだと思います。それがほんとうに地域に深く入っていったという、そのことの20年間の歴史じゃないかと思えますし、だからこそ、今、ほんとに川崎市民クラブとしての、川崎フロンターレとしての確固たる地位があるんじゃないかと、揺るぎない市民からの支持があるんじゃないかと僕は思っています。

これまでも宝でありましたし、特にやっぱり川崎は、いつも言っていることですが、地形的に細長いところなので、南北の一体感がなかなか持ちにくいところの中で、川崎フロンターレというクラブが川崎の、ある意味シンボリックな存在として、市民を1つにまとめてくれている存在になっているのではないかと思っています。

やっぱり地域貢献をよくしていただいている。一番、クラブ創設当時からやっていただいているというのが随所に見られていて、ちょっと後段の質問にもかぶるところがあるんですが、例えばBリーグのところに、開幕戦のときにはフロンターレから応援メッセージが出るだとか、あるいは例えば赤い羽根の募金、今やっていますけれども、そこにもふるん太君が来るとか、きのうもプロレスのイベントがありましたけれども、そこにもフロンターレと一緒にやっていくということで、あらゆる川崎のスポーツだとか、いろんな文化的なイベントだとかということに、フロンターレとしてすごくかかわっていただいて、一緒に地域を盛り上げていこうという、その精神がずっと続いているということが、やはり川崎の宝だと言っている理由ではないかと思っています。

後段の質問で言うと、要は行政としても後援会の会長を市長が務めるのは珍しいというのは、まさにそういった経緯もあったし、Jリーグの中でも地域貢献度という形でアンケートをとっていますが、6年連続でリーグの中でトップを維持し続けるということは、いかに市民に愛されているかということの裏返しだと思います。

そういう中で、横浜と違って私どもは1つのチームですから、まさに行政もそうですけど、市民の皆さんとクラブと、みんながいつも一体になって動いているという意味では、すごく大きいのではないかと思っていますし、繰り返しになりますけれども、ほかのスポーツとのコラボレーションというのが、フロンターレは非常に積極的に、企業だとか何だとかという、そういう枠を超えてやってくださっているので、スポーツで川崎を盛り上げようというところで貢献いただいております。そのことについても私はとても感謝しております。

幹事社： 関連で1つだけ。そういう形で、後援会の後に、魅力アップ実行委員会で

したっけ、事業委員会だったかな。サポーターとか市とかが入ってやっていますよね。ああいう取り組み、今もクラブからのいろんな提案を受けて、いろいろ相談してやっているというパターンなんですけど、あのパターンはこれからも続くというお考えなんですか。

市長： そうですね、これからもそういうふうにやっていきたいなと思います。

幹事社： わかりました。ありがとうございました。

司会： では、各社様、よろしくお願ひいたします。

(英国視察について)

記者： 先般の英国視察の関係で、得られた果実とか、あとおもしろかったエピソードなんかがあれば教えていただけますか。

市長： それぞれ非常に大きな、有意義な話もできましたし、また施設を見ることができました。特に今回、BPA、英国パラリンピック委員会の幹部の皆さんと親しく懇談、懇親できまして、具体的にこれから私どもがBPAを受け入れる用意があるということと、こんなことができますという提案をさせていただいて、非常に前向きな感触を得られたということは非常に大きかったと思います。

BPAの関係者もこれまでも川崎の陸上競技場をはじめとした施設については見させていただいているんですが、私自身が代表とお会いしたというのは今回初めてということでもありますし、非常にこれから密に連絡をとっていきましょうということができたのは非常に大きかったと思います。

それから、施設面で見ると、ラフバラー大学というところに訪問したんですが、ここはやはりいろんなスポーツ関係者、オリンピックもパラリンピックも大学生も、あるいは栄養士だとか理学療法士だとか、そういういろんな専門の人たちが1つの施設のところに集まって、みんなでアスリートを応援する体制がとれているということは非常に勉強になりました。特に大事だと言われたのが、やはり障害者の施設という形で分離するのではなくて、インクルーシブな環境を整えていく。健常者も障害者ともに高め合っていく、刺激し合いながら高め合っていくという、まさに私どもがパラムーブメントで言っている、まざり合っていくということがいかに大事かということを非常に強調され、かつ、それについて非常に感銘を受けたところであります。

いろんな意味で有意義な、そのことを議長と国際交流協会の山田会長と3者で共有できたということは大変有意義だったと思っています。

記者： ありがとうございました。

(給食センター建設に対しての企業の訴訟提起について①)

司会： ほか、いかがでございましょうか。

記者： じゃ、すいません。昨日、川崎市麻生区に建設中の給食センターをめぐって、隣接している精密機器メーカーが川崎市を相手取る行政訴訟を起こしました。もう既にそういったこと、ご存じかと思えます。事務方からも既にペーパーも出ていますが、改めて市長から、今回、提訴に対して、市としてどのような見解を持っているか。おそらく建設は、これは当然続けるということだと思うんですが、相手方も言っている公益性について、改めてどのようにお考えになっているか、センターの公益性についてどのように考えているかというところを教えてください。

市長： きのも局長の名前でコメントを出させていただいていると思いますが、同じことで、現時点においても訴状は届いておりませんので、訴状が届き次第、適切に対応したいとは思っておりますので、それからということになると思えます。公益性については、言わずもがなで、大事なことでありますので、これまで申してきたとおりであります。

司会： ほかはいかがでございましょうか。

(給食センター建設に対しての企業の訴訟提起について②)

記者： 関連で。先方の、麻生区の工業団地の、先方の社長が市長が視察に来られたときに建設しないでほしいとかということをお伝えしたりとかしていたという言い方をしていた、ちょっと、もしかしたら事実認定に差があるのかもしれないですけども、そういうこともおっしゃっていたんですが、市長としてはそういう声は受けとめていたことは受けとめていたんですか、これまで。

市長： 今、そのご指摘のコメントのような表現だったかどうかというふうなのは、これは事実関係があるので何とも申し上げられないんですが、いろんな形でのやりとりというのはこれまでもありました。それについて、誠実に私どもも対応してきたつもりであります。

記者： 建設中止を求められたという認識は、今までもあったという。

市長： 中止という……。

記者： そういう感じじゃないですか。

市長： ちょっと私も齟齬があつてはいけませんので、詳細については控えさせていただきます……、係争中のことになってしまいますので、はい。

司会： いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして会見終了といたします。ありがとうございました。

それでは、この後、マイスターの方に一度会場にお戻りいただきまして、ぶら下が
り取材にご対応いただきますので、ご希望の方はよろしく願いいたします。ありが
とうございます。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したう
えで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355